

2006.1.1

『漢訳東西洋文学作品編目』とその編者
 ……………樽本照雄 1
 晩清小説作者掃描(伍) ……………武 禧 7
 『新編増補清末民初小説目録』の
 『小説海』掲載作品正誤・補……杜 筆恩 9
 商務印書館の火災(1) ……………沢本香子12
 漢訳アラビアン・ナイト(14) ……………樽本照雄20
 清末小説から25 本年もよろしくおねがしいた
 します。『清末小説』第28号は、予定通り発行し
 ました。昨年9月、数年ぶりに山東済南を訪問。
 周辺道路の完備と空港の設備には驚きました。
 変貌ぶりが大きいのです。用事というのが山

清末小説研究会 日本〒520-0806 滋賀県大津市打出浜 8 番4-202 樽本照雄方

『漢訳東西洋文学作品編目』とその編者

樽本照雄

1 問題の所在

『漢訳東西洋文学作品編目』についての疑問は、ふたつある。

出版資料に再収録されたものを見ると、編者は「蒲梢」だと明記してある。この蒲梢とは誰のことか不明であった。というよりも、いくつかの説があって確定で

きなかった。

もうひとつの疑問は、そもそも『漢訳東西洋文学作品編目』の編者は誰なのか、ということだ。

以上のふたつは、似ているが実は別物である。

この問題は、1970年代から日本においてのみ言及されている。それだけ詳細な部分に入り込んでいるわけだ。中国のほかでは、話題になることもない。問題がある、ということ自体が知られていない。

なぜこのような疑問が発生したのか、そのいきさつから説明しよう。

2 張静廬の出版史料

研究者が利用する出版資料のひとつに張静廬の編集ものがある。

本稿で問題にしている該目録は、張静

廬輯註『中国現代出版史料甲編』(北京・中華書局股份有限公司1954.12上海初版。271-323頁)に収録されている。蒲梢「漢訳東西洋文学作品編目 一九二九年三月止」という。こちらは、研究者ならば誰でも知っているだろう。

日本を含んだ諸外国の翻訳作品を収録する。ゆえに「東西洋」という。翻訳研究には、貴重な目録であることはいうまでもない。ただし、各単行本の発行年月が記録されていないから、あくまでも参考資料にとどまる。

この目録には説明がついている。出版史料に再録されたとき、追加されたい。1954年元旦の日付で徐調孚がつぎのように書く。

この目録は、私が1929年4月に蒲梢という筆名を用い、上海の真美善書店との約束で(曾)虚白がもともと編集したものを修正してできた(就虚白原編而修訂編成的)。当時、私は相当な労力を費やし、毎年1回は修訂するつもりだったが、初版を1,500冊印刷して、数年にわたり発売したが完売することはなく、修訂は当然のことながら不可能になってしまった。

318頁

張静廬は該目録を自分の編集ものに収録するにあたり、「蒲梢」という名前しか出さなかった。しかも、解説を書いたのが徐調孚というのだから、該目録は、蒲梢 = 徐調孚ひとりによって編集された

しか見えない。

ところが、これよりも以前に、該目録について触れている文章がある。

3 橋川時雄の記述

橋川時雄『中国文化界人物総鑑』(北京・中華法令編印館1940.10.25初版/名著普及会復刻1982.3.20)である。曾虚白の項目に「漢訳東西詩^マ文学作品編目」(十八年真美善書店印)(581頁)をあげる。書名の1字は、明らかに誤植だ。こちらの記述では、曾虚白が編集したことになっているのだ。

というわけで疑問が発生する。

『漢訳東西洋文学作品編目』の編者は、曾虚白なのかそれとも徐調孚なのか。曾虚白と徐調孚のふたりがいて、張静廬が編集した出版史料に収録されているものを見れば「蒲梢」としか書かれていない。ならば、蒲梢という筆名は曾虚白も含むのではないか、という疑問が出てきて当然だろう。

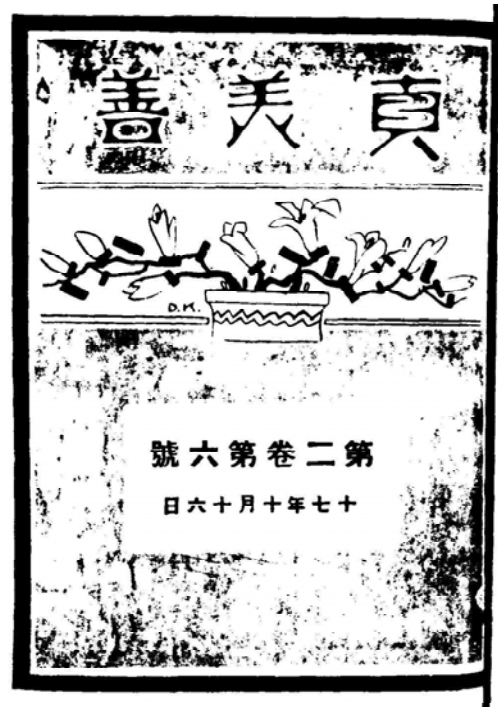
私は、台北にお住まいの曾虚白を訪問したことがあった。その後の手紙のやりとりで、以上の疑問について質問をし返答を得た。それを中村忠行に伝えて、以下に示す注釈になったのである。

中村忠行「清末探偵小説史稿(二)」

『清末小説研究』第3号1979.12.1。

16頁

注5)「蒲梢」の本名については、「徐調孚」(袁湧進編『現代中国作家筆名録』)・「曾虚白」(橋川時雄編『中国文



『真美善』第2卷第6号1928.10.16

化界人物繪鑑』・「曾樸」(馬泰來「林琴南所記小説書目」)の三説があつて、必ずしも明確ではない。これについて、樽本照雄氏が曾虚白氏に質したところ、「漢訳東西洋文学作品編目是否拙作。本人從未著手此項著作，橋川先生頗有誤會。至蒲梢何人，實非素識」といふ返信を得られてゐるから、同氏はもとより曾樸説も否定さるべきか。(下略)

蒲梢が徐調孚であるのはよい。ただし、曾虚白自身が該目録の編集を否定した点は注目すべきだ。

以上のことから次の結論に落ち着く。徐調孚ひとりが編集した『漢訳東西洋文学作品編目』というのが正しいのだろう。

曾虚白の証言があるのだから、彼は、この目録には関係していない。長らくそう思っていた。

だが、最近、それがおかしいと感じるようになった。

4 疑問が再び発生する

調べていて、(曾)虚白「中国繙訳欧美作品的成績」(『真美善』第2卷第6号1928.10.16)にぶつかったからだ。表題のとおり欧米作品の翻訳目録だ。原作者と原作がどういう漢訳名で、訳者は誰か、を記した簡単な一覧表である。

1例を示そう。

Scott, W. Ivanhoe 撒克遜劫後英雄略 林紆

出版社も発行年月も書かれてはいない。そういう翻訳作品がある、というだけの目録である。

この目録を基礎にし、日本、インド、ロシアなどを追加して『漢訳東西洋文学作品編目』が成立したらしい。

その違いがあるかどうか上と同じ例を示しておく。

司各脱 (Sir W. Scott, 1771-1832)

撒克遜劫後英雄略 (Ivanhoe) (文言) 林紓 商務

作家の生卒年、あるいは出版社名をつけ加えた。ただし、こちらも同じく単行本の発行年月を示さない。

たしかに、曾虚白の目録を徐調孚が修訂している。徐調孚の解説と符合する。

だが、いくら修訂したとしても、もともな目録が存在していることを無視してもいいのか。当然、無視してよいはずはない。たとえば署名は、「(曾)虚白編、蒲梢(徐調孚)修訂」と表記するのが普通ではなかろうか。張静廬が示した曾虚白に対するあつかいが不自然だと感じる。

以下は、清末小説研究会のホームページにかかげたもの。以上のいきさつをふまえて書いた。

2005.1.1

本年もよろしくお願いたします。

張静廬が編集した出版史料は、今でもよく利用します。便利な史料で、原物を見ることができないとき、使わざるをえません。

ある史料について、奇妙な処理がほどこしてあるのに気づきました。

蒲梢「漢訳東西洋文学作品編目一九二九年三月止」(張静廬輯註『中国現代出版史料甲編』北京・中華書局股份有限公司1954.12上海初版)なのです。

「一九五四年元旦徐調孚誌於首都」と表示のある解説文がついていません。編者の「蒲梢」は、徐調孚の筆名だとわかるでしょう。

以上の表記によると、該目録は、蒲梢すなわち徐調孚の編集物だということになります。

ところが、もともとは、虚白編、蒲梢修訂『漢訳東西洋文学作品編目』(真美善書店1929.9)であるらしい。

さかのぼれば、(曾)虚白「中国繙訳歐美作品的成績」(『真美善』第2巻第6号1928.10.16)を徐調孚が大幅に増補して成立したものです。

つまり、『漢訳東西洋文学作品編目』は、曾虚白の編集を基礎にしてできた翻訳目録です。ゆえに「虚白編、蒲梢修訂」という表記は実態をあらわしています。

ここで奇妙なことが起ります。張静廬は、該目録を史料集に採録する時、曾虚白の名前を削除しました。

曾虚白の名前を出したくなかったということでしょう。曾虚白が台湾に行ったことが原因なのでしょうか。勝手なことをするものですね。

阿英にしても、魏紹昌にしても資料に無断で手を加えている箇所があります。張静廬もそうだったとは思いませんでした。

問題は、上に書いた「虚白編、蒲梢修訂『漢訳東西洋文学作品編目』(真美善書店1929.9)」が事実であるかどうかだ。くりかえしていうと、「虚白編」と明示されているか、が焦点となる。

原物を見ていないのだから、この時点では、以上のところまでしか書くことができなかった。

あらためて探索し該目録の複写を入手した。

5 問題の解決

原物を見れば、問題はおのずと解決する。

表紙には、虚白原編、蒲梢修訂『1929 漢訳東西洋文学作品編目(第一次)』とするされている。

扉は、書名から「1929」をはずし、「第一次」を「第一回」に変更している。どちらにせよ「第二回」を意図していたことがわかる。

奥付(といっても前付けだが)には、1929.9.28出版、1-1500、実価三角、上海真美善書店発行、とある。印刷数は1,500であった、という徐調孚の証言と一致する。



扉

「編例」2頁のあとに「一日本」の書目が始まる。本文は117頁、「西文人名索引」7頁、「中文人名索引」(日本人名の索引)2頁という構成である。

曾虚白「中国繙訳欧美作品的成績」が原形であることを見逃してはならない。蒲梢がこれにもとづいて増補訂正したものが『漢訳東西洋文学作品編目』である。その表紙、扉に見られるように「虚白原編、蒲梢修訂」という表記のしかたが、正当でかつ正確なものであることはいうまでもない。すなわち、張静廬が曾虚白の名前を削除した事実がこれで確定した。

原物が横組みであるのに対して、張静廬の編集物は縦組みというおおきな違いがある。

「編例」について、出版史料収録のも

のはほぼ同じだ。ただし、いくつかの書き換えがある。

1で単行本を主とすること、2で白話文言のいずれも採録すること、3でハガード、コナン・ドイル、ルブランなどの三四流作家の作品は採録しないこと、4で詩歌、戯劇、散文などには注をつけること、などには変更はない。

5. 論文及文学史等之訳本，如莫爾頓的近代文学研究等，【因限於時間，初版内】未及列入，【且俟再版時補加】。

【】でくくった字句は、出版史料では削除する。

原物の編例6では、作者名のない民間文学作品については採取しないことをいう。出版史料では、この部分を5に編入している。採取しないものは、まとめたらしい。

7. 編者確知已有訳本，惟尚在印刷中者，為便利計亦列入，于書名下注明“在印刷中”。

出版史料では、「六」にして原文の「在印刷中」を「未出」と書き換える。

次の8、9、10は、出版史料では削除する。

8. 本書次序之排列，係以国別，先從亞洲最東方之日本起，依序排列，至西半球之美国為止，而以雜訳諸国

之作品置于最後，每国内之，先以總集，次乃個人作品。作家之先後，則日本以生年之先後為序，其餘以人名首字之ABC為序。

9. 每書或每篇之末，均附加原文，有原書未注明，或未查悉者暫缺。

10. 字体大小之説明：

三号黒体字 国名

四号字 作家名

五号字 書名

六号字 一書名中包含之篇名。

配列の順、原作名のあるなし、活字の大きさなどについてだ。再録するにあたって、活字の大きさなど原文のままに再現できないから削除したらしい。ただし、8の配列の順は、収録してもよかったのではないか。なぜ削除したのか不明だ。

11. 編製本目截止十八年三月三十一日止，四月一日以後出版者均未列入。

出版史料は、民国18年に（一九二九年）と注を加えた。

最後の12は、出版史料では削除されている。

12. 本書擬于每年初重版修訂一次，如蒙讀者不吝賜教，或以錯誤遺漏見示，或以新出書名惠告，均所歡迎，特此預謝。

毎年はじめに修訂を行ないたいという

編者の希望は、徐調孚が出版史料で書いていたことと一致している。

出版史料であらたに加えたのは「編例」最後の「(本文全係人名書名、為排版便利起見、不再加排專名線。)」だ。この新しい注は、あたかも原文に傍線が引いてあるような印象を与える。原物にも傍線は施されていない。余計な注であったと考える。

原物にあった索引は、出版史料では削除された。しかたがなかったと思わないでもない。だが、せっかくの索引だから、せめて原書には作成されていた事実と言及するくらいはしてもよかったのではないか。なにもいわないところを見ると、張静廬は、索引に価値を見いだしていないと思われてもしかたがない。

曾虚白自身は『漢訳東西洋文学作品編目』を編集してはいない、と証言した。これについてどう考えるか。

徐調孚の証言を参考にしながら、私が考えるいきさつは、こうだ。

曾虚白「中国繙訳歐美作品的成績」があることはすでに説明した。蒲梢(徐調孚)は、該稿にもとづいて『漢訳東西洋文学作品編目』を編纂する。徐調孚は増補の編集にあたって、虚白の許諾をあらかじめ得ていたであろう。だが、あらたな編集には虚白は関わりをもたなかったのではないか。ゆえに、「虚白原編」と明記したのは、徐調孚から曾虚白に対しての謝意を表したものだとして理解できる。また、曾虚白の了解があるから彼の経営する真美善書店から出版された。

晩清小説作者掃描(伍)

武 禧

(零一三)

山石老人

小説創作：《快心録》

山石老人：(姓名、居里無考)約生於1835年左右。1860年后做《紅樓夢》撰寫《快心録》。

(《中國通俗小説総目提要》(p.705)：“《快心録》未見。精抄本，首自序”。惜筆者未見。一粟(周紹良、朱銑南)之《紅樓夢書録》將其列為21種倣作之一。

(零一四)

梁朗川

小説創作：《瓦崗砦演義》

梁朗川：(未見任何資料，待考)

経緯を以上のように考えれば、曾虚白の『漢訳東西洋文学作品編目』は「編集していない」発言も、厳密にいえば、それで正しい。 □

(零一五)

好古主人

小説創作：《宋太祖三下南唐》

好古主人：(未見任何資料，待考) 1865年出版《宋太祖三下南唐》，又名《俠義奇女傳》、《宋太祖三下南唐被困壽州城》。

(零一六)

魏秀仁

小説創作：《花月痕》

魏秀仁：(1819-1874) 福建侯官人。字子安，子敦、伯肫，號眠鶴主人，民鶴，道人，眠鶴山人，咄咄道人、不悔道人、無思子等。室名陔南山館。幼隨父研經史。28歲取秀才，29歲道光丙午科舉人。后屢試不第，遂遊歷四方，入晉撫王慶云幕。客川、陝十余年，曾為太原知府東席以課詩為業。又執教於渭南、蓉城。中年治程朱之學，晚年返鄉潛心道學。著有《陔南山館詩話》、《洞仙殘淚》等多種，惟《花月痕》流傳甚廣。關於《花月痕》(又名《花月姻緣》) 著作時間諸說不一：一說寫於東席太原知府時，課女弟子習詩，閑暇無事，撰寫小説以遣寂寞。一說人至晚年，悔少年時光陰虛度，不無懷念之情。

對《花月痕》的作者魏秀仁研究較多，時人謝章铤有《課余續錄》、《魏子安墓誌銘》記述詳情。后魯迅《中國小説史略》、蔣瑞藻《小説考證》、陳則光《中國近代文學史》、近年郭延禮《中國近代文學發展史》、范伯羣《中國近現代通俗文學史》等均有論述，雖諸說不一，但大致情況可知，不贅。

(零一七)

魏文中

小説創作：《繡云閣》

魏文中：(道咸年間人。生卒、居里待考) 字中庸，號拂塵子，齋名：蓮香別墅。1869年前撰寫小説《繡云閣》(又名《繡云仙閣》)，認為不要認為小説是“小技”，而是要用小説達到“黜邪崇正”的目的。

存本有自序和重刊序。全文錄於下：

《繡云閣·序》

吾見世之術，慕神仙而欲學神仙之為人者，往往為外道所壞。非避兄離母，獨處深山，而人倫之道不講，即鉤深索隱，視為奇貨，而正大之路不由。無怪乎邪教誣民，結黨壞世者層見於朝。豈知修仙之道，在乎先盡五倫。五倫克盡，聖賢可期，何啻仙術？然無以講明切究，人多入迷途而不知。

予也不揣固陋，編輯《繡云閣》一書，提綱挈領，不外敦倫、煉氣、歸神，端由誠意。其中雖有山精水怪散於字里行間，一則以見正心修身之侯，人不如物；一則以見澡身浴德，心雜如麻。所以吉人煉道，輒以清心寡欲為入門第一要訣。吾願有志於斯者，須認清題目，切不可為邪教所誤焉。且是書即為學道指其端委，故又以孝弟忠信，為士農工商輩事事條分。不知天上神仙，誰缺孝弟忠信；塵世人類，孰盡孝弟忠信，是書不辭瑣屑，逐一分明。謂為學道而誤入旁支者大聲疾呼焉，亦無不可。

世之得閱此書者，不以予之小技為不齒，而共諒予黜邪崇正之苦衷也，則幸甚。

咸豐三年九月十八日拂
塵子自識於蓮香別墅

《重刊 繡云閣 序》

嘗觀歷朝傳書多矣。或描寫才子佳人，則盡態極妍，豈知閨閣之形容太露，是啓人以淫盜之媒。間有拋去才子佳人而寫丈夫氣概，又以武雍是尚，結拜爲黨，導人以大逆之路，甚而描寫叛弑與夫艷詞淫詞，則助人以奢侮之風。敗常之事，均不得爲傳書之善者也。

若《繡云閣》一書，其始則以人倫大道開其端，而金丹大道繼之。且於大道中又爲野方外術弁其眞僞，俾天下后世有志斯道者，得所趨向。不致誤入旁途，結黨成羽，創逆天下。洵可爲我朝黜異端以崇正學之一助。外者而世情所有一一描出，無不法戒昭然，雖談論多山水精怪，要皆從人心之不正而生，非好言柔怪離奇以炫人心耳。

願世之閱者，不徒以文章曲折見長，亦不徒以詞章富潤爲美，須玩其綱領所在，旨趣所在，知非尋常小説可比，而有裨於世道人心也，則幸甚。但是書稀少，知板之不存久矣，茲特重付棗梨，梓行於世。故序之。

八十歲貢虛明子記



『新編增補清末民初小説目録』の
『小説海』掲載作品正誤・補

杜 筆 恩

拙稿を前号に発表後、『小説海』掲載作品について更に“創作に分類されているが実は翻訳”という作品や翻訳に分類されている作品の詳しい情報が判明したので、報告する。

b0070* 八月二十(短篇小説) 半儂(劉半農)訳 『小説海』1巻4号1915.4.1 訳 PERCY ANECDOTES月報

*「(短篇小説)」はない。

原作の詳細が判明した。『(英語世界叢書 第一編)戀と戦』(小日向定次郎著 博文館1908.12?.13?)中の“SECRET OF FORTUNE TELLING (From the Percy Anecdotes)”日語訳名「占易の秘訣」からの転訳。この本は、見開きで左頁に英文、右頁に日文が書かれている。

内容の一致と、「八月二十」本文中の“(原文作Sutler。乃隨營之賣酒人。專以酒賣於軍士者。日本譯爲從軍酒保。)”も日語訳と一致することにより、判断した。

b0428* 畢密司復仇記 何爽著 閑雲山人

本誌次号の公開は、4月を予定しています

訳 『小説海』1巻1号1915.1.1

* 原作が判明した。原作はNATHANIEL HAWTHORNE “TANGLEWOOD TALES” (1853) 中の “THE PYGMIES”。

d0210 盗電記 史九成 『小説海』3巻9号
1917.9.5

* 創作ではなく、翻訳。CRAIG KENNEDY もの。原作はARTHUR B.REEVE “THE WAR TERROR” (1915)中の “VII THE WIRELESS WIRETAPPERS”、“VIII THE HOUSEBOAT MYSTERY”、“IX THE RADIO DETECTIVE”。

d0384 電殛餘生 幼新 『小説海』1巻7号
1915.7.1

* 創作ではなく、翻訳。原作はARTHUR CONAN DOYLE “THE LOS AMIGOS FIASCO” 1892.12。

k0148 空気流質 静一、半禪 『小説海』
2巻8号1916.8.1

* 創作ではなく、翻訳。CRAIG KENNEDY もの。原作はARTHUR B.REEVE “THE SOCIAL GANGSTER” (1916)中の “XXII THE ABSOLUTE ZERO”、“XXIII THE VACUUM BOTTLE”、“XXIV THE SOLAR PLEXUS”。

m0728 名馬 桌呆成齋 『小説海』1巻10
号1915.10.1

* 前号の拙稿において、創作ではなく翻訳で、原作がARTHUR CONAN DOYLE “THE ADVENTURE OF THE SILVER BLAZE” 1892.12であることを明らかにした。その後の調査で、実は、三津木春影『(探偵奇譚)吳田博士第三篇』(中興館書店1912.11.18)中の「名馬の犯罪」からの転訳だと判明した。(この日語訳も、翻訳であることを述べていない、当然、

原作を明記していない。樽本照雄「中国におけるコナン・ドイル(1) - 附: コナン・ドイル漢訳小説目録(初稿)」107頁(『清末小説』24(清末小説研究会2001.12.1))に基づく)

訳文の省略箇所・変更箇所的一致から判断した。

n0153* 廿六人 半儂(劉半農) 『小説海』2巻5号1916.5.1 高爾基(GORKII)今訳《二十六男和一女》(郭延礼)

* 原作が判明した。『(英語世界叢書七)大陸作家小品』(山崎貞訳 博文館1910.?.?)中の “TWENTY-SIX AND ONE (By Maxime Gorky)” 日語訳名「二十六人對一人」からの転訳。この本は、見開きで左頁に英文、右頁に日文が書かれている。原作は
1899.12。

“TWENTY-SIX AND ONE (By Maxime Gorky)” 日語訳名「二十六人對一人」が前半のみの部分訳(厳密には、前半終了直前の中途半端な個所までの部分訳)であり、「廿六人」も全く同じ個所の訳なので、日語訳からの転訳と判断した。つまり、半儂(劉半農)訳「廿六人」は全訳ではなく、不完全な部分訳である。

n0565 女偵探 上下 徐大純 『小説海』1
巻12号1915.12.1

* 創作ではなく、翻訳。「上」はモーパッサン作「女探偵」、「下」はモーパッサン作「再び女探偵」から、つまり日語訳からの転訳。「女探偵」及「再び女探偵」共に原抱一庵主人訳『(小説)泰西奇文』(知新館1903.9.10)所収。但し、両作品ともMAUPASSANTの偽作。原抱一庵主人が拠ったのは、GUY DE MAUPASSANTの英訳 “THE COMPLETE WRITINGS OF GUY DE MAUPASSANT” (17

vol. 訳者不記 St. Dunstan Society, 1903)中の
“SHORT STORIES OF THE TRAGEDY AND
COMEDY OF LIFE” 第3冊所収の“IN
VARIOUS ROLES”(「女探偵」)及“DELILA”
(「再び女探偵」)、或は同じく英訳“(THE
AFTER-DINNER SERIES)SHORT STORIES”
第5冊(translated from the French by R.
Whitling, M. A., Oxon Mathieson and co., ltd.
刊年不記)所収の“AN EXOTIC PRINCE”
(「女探偵」)及“DELILA”(「再び女探偵」)の
どちらかと思われる。

作品名の一致と訳文の省略個所の一致によ
り、日語訳からの転訳と判断した。

MAUPASSANTの偽作だと判断したのは、
大西忠雄「モーパッサン偽作一覧表(英語版並
に邦譯のもの)」(『日本比較文學會會報』12
(1958.1.1))に基づく。但し、偽作としてい
るのは英訳のみで、原抱一庵主人訳「女探偵」
及「再び女探偵」が“IN VARIOUS ROLES”
(“AN EXOTIC PRINCE”)及“DELILA”の
翻訳であることは指摘していない。また、
“DELILA”を“DELIA”に誤る。

r0083 日光殺人案 舍我、半儂(劉半農)
『小説海』2巻12号1916.12.1

* 創作ではなく、翻訳。PAUL BECKもの。
原作はM. McDONNELL BODKIN “PAUL BECK,
THE RULE OF THUMB DETECTIVE”(1898)
中の“THE MURDER BY PROXY”。

w0582* 無人島 (日)江見水蔭著 済中訳
『小説海』1巻9-12号1915.9.1-12.1

* 原作が判明した。原作は江見水蔭『探検
小説)無人島』(成功雜誌社1907.3.18)。

x0429* 橡皮疑案 史九成訳 『小説海』2
巻5号1916.5.1

* 原作が判明した。CRAIG KENNEDYもの。
原作はARTHUR B.REEVE“THE DREAM
DOCTOR”(1914)中の“XIV THE CRIMEOMETER”
の一部分、“XV THE VAMPIRE”、“XVI
THE BLOOD TEST”。

y0835* 易子而教 (英)哀迪生著 遺生
『小説海』2巻5号1916.5.1

* 原作が判明した。原作はJOSEPH
ADDISONの日刊紙“THE SPECTATOR”NO.
123(1711.7.21)。

y0930 印度花 健人 『小説海』1巻3号
1915.3.1

* 創作ではなく、翻訳。原作はRUDYARD
KIPLING “PLAIN TALES FROM THE
HILLS”(1888)中の“BEYOND THE PALE”。
「印度花」末に“此書原本係英文。爲法人法
比列與于米挨二人。以法文譯出之。今又從法
文譯成華文。……”とあるが、法文訳書につ
いては未詳。

y1660 岳克之疑案 魏孫 『小説海』3巻
12号1917.12.5

* 創作ではなく、翻訳。THE OLD MAN IN
THE CORNERもの。原作はBARONESS
ORCZY “THE YORK MYSTERY” 1902.5。



『近代文学研究・留得』第2輯(2005.8)
が発行されました。「《劉鶚詩文集校輯》
編輯工作啓動」は、将来、劉鉄雲全集が
発行されるという予告です。今後の活動
が注目されます。その第3輯(2005.10)
で目を引くのは、劉鉄雲の『弧角三術』
と『勾又天元草』が発見されたことをの
べていることでしょう。これは珍しい。

商務印書館の火災 (1)

いわゆる「焼け太り」の不可解

沢本香子

商務印書館が創業して数年間の情況について、いまだに不明の部分がいくつかある。資料が残っていないらしい。商務印書館自身の説明によると、1902年の火災で書類が消滅したからだ、ということになる。そもそも、この火災そのものが明らかにされていない部分を多く含んでいる。

商務印書館が遭遇した火災の意味を考えるためにも、創業の過程を簡単に復習しておく。

正式に開業したのは、光緒二十三年正月初十日(1897.2.11)だった。その場所は、江西路北京路首徳昌里末街3号である。3間2側房を月額50余元で借り、印刷機3種類10台と活字鑄造機などを購入したら、みなで出しあった最初の資金3,750元はなくなった。鮑咸恩、夏瑞芳、郁厚坤の3人が、まず専任で働くことにする。鮑咸昌と高翰卿のふたりは、美華書館に残ってそのまま勤めた。

翌年、借りていた家屋が倒壊した。移

転先は、北京路慶順里である。なじみの美華書館から道路を隔てた隣りだ。12部屋を借りて(6部屋という説もある)、植字部と印刷部が置かれた。

創業者のひとり鮑咸恩には、咸昌と咸亨の弟がいる。彼ら兄弟は、商務印書館内部で大鮑、二鮑、三鮑と呼ばれていた。北京路慶順里に移ったのを機会に、美華書館で働いていた二鮑と三鮑も商務印書館に入ることになる。それぞれ植字部と印刷部を主宰した*1。

創業後の数年は、ほとんど家内企業とかわらなかった。夏瑞芳は社長とはいえ、営業から店番までなんでもこなさざるをえない。彼もほかの仲間と同じカトリック教徒だ。家族写真を見ると、遅くとも1913年までに9人の子供に恵まれている。月給が24元では生活するには不十分だった。印刷の注文を取るかたわら、保険会社のブローカーも兼務して家計の足しにする必要があった理由だ。

中国語の注釈をつけて編集した英語教科書『華英初階』が売れて経営的には一息ついた、ということはある。だが、経営状況はかならずしもよいとはいえなかった。いくつかの証言によれば、高翰卿に支払いの保証をしてもらい、沈伯芬に営業資金2,000元を用立ててもらい、張元済に保証人になってもらって銭荘から借金をする、などというありさまだ。

そういう状況であるにもかかわらず、1900年に修文書館の機器を買収している。日本の築地活版製造所が上海で10万円近くを投資して設立した印刷所兼印刷用品

販売所だった。上海から撤退するので機材一式を商務印書館は1万円で購入したという。仲介者は印有模(錫璋)である。修文書館の印刷機器、各種活字などを入手して設備は充実した。紙型を使用するようになったのも商務印書館が最初である。ただし、この資金をどこから借りたのか不明だ。誰も何も説明しない。自分たちで使用しない機器、部品は販売した。だが、それで1万円が回収できたとも思えない。印有模が立て替え払いしたのではないかと推測する。

不良翻訳原稿のために1万円の損失をこうむったこともある。

それまでにかさなった負債を解消するために第1次増資を行なった。1901年のことだ。

最初の資本金3,750元は7倍に評価することにした。すなわち、相談の上、2万6,250元だと決めて、それに加えて張元済と印有模のふたりの投資金額が2万3,750元だ。合わせて総額5万元である。増資分の2万3,750元が、最初の資本と修文書館の買収費用、および不良翻訳原稿の損失を合計したものであることは偶然ではない。

そこに待ち受けていたのが火災だった。

火災が発生したのは、光緒二十八年七月十九日(1902.8.22)のことだ。

火災とそれにまつわる保険金については、私はすでに文章を書いている。本稿で、もう一度むしかえすのには理由がある。ひとつは、新しい文章を見つけたからだ。ふたつは、重要な事柄でありなが

ら多くの研究者が見逃していると考えからである。

使用する文献は、以前のものと重複する。説明の必要上くりかえすことになるがご了承いただきたい。

火災発生

焼けたのは、借りていた部屋だった。長屋形式の一部分だと考えていいだろう。重要なのは、「借りていた」という事実だ。自前の建物を購入する、あるいは新築するなどの経済的余裕は、当時、なかった。まず、火災の状況について新聞記事を見てみる。

『同文滬報』光緒二十八年七月二十一日(1902.8.24)

火警紀聞 前晚鐘鳴十二点捕房蒲牢乱吼旋分三下訪知火起於北京路塊商務印書館四十一号門牌發時烈烈轟轟冒穿屋頂英法美三界洋龍各驅皮帶車馳至汲水狂灌祝融君勢方不敵旋即斂威而退是役也共焚燬房屋三幢聞均保有火險云(火災ニュース 一昨晚十二時、警察署の鐘が激しく鳴った。ただちに三方を調査し、北京路角41番地の商務印書館に火災が起こっているのがわかった。盛んな火は、すぐさま屋根をつきぬける。イギリス、フランス、アメリカ3租界のポンプ車がかつけ水をそそぐや、火の神様(祝融君)の勢いはようやく失せた。家屋3部屋が焼け落ちるが、すべて火災保険をかけていたという)

この報道を見れば、火元は、商務印書館そのものである。類焼ではない。焼け落ちたのは家屋3部屋だ、と書いてある。借りていた12部屋の一部分ということになるのか。しかし、残りの部屋が焼け残ったとしても無傷のままであるわけがない。水をかぶっているはずだ。紙をあつかい印刷と出版を商売としている商務印書館にとっては、大きな損失であったことは容易に理解できよう。

「すべて火災保険をかけていたという」。新聞記事にわざわざ載ったということは、当事者から取材をしたものと見える。商務印書館が強調したかったことだと理解する。火災保険は、普通に考えれば、家屋だけにかけるものだろう。借間人が、家主より強制的に加入するようにいわれるはずだ。「火災保険」とわざわざいうのは、家屋のほかに家財、この場合は印刷機器などにも保険をかけていたということだろうか。詳細は、わからない。

事件直後の新聞記事だ。あとで火災保険がどれくらいおりたか、などの言及がないのも当たり前である。

以上の新聞記事から理解できるのは、商務印書館自身の失火であること、火災保険をかけていたこと、のふたつである。詳細が不明なのはやむを得ない。火災の事実だけでも明らかになったところに価値がある。

商務印書館は、上の『同文滬報』と同じ版に自社広告を出している。十九日夜に失火したこと、連絡は北京路40番地に

してほしいという。

印刷を請け負っていた『外交報』は、火災のために期日通りに刊行することができなかった。数号をまとめて「補印」という形で発行する。その自社広告で以下のように説明している。

「商務印書館広告」『外交報』壬寅第19号(第21期)光緒二十八年八月十五日補印(1902.9.16)

.....雖不幸于上月間忽遭回祿尚幸棧房鑄字房書板房等均未殃及現已重行部署益擴規模仍在北京路原處隔壁四十號內照常工作.....(.....先月、不幸なことに火災にあいましたが、幸いなことに倉庫、活字鑄造部、書板部などは災難をまぬかれました。現在、すでに新たな配置を行ない、規模をさらに拡張し北京路の元のところの隣家40番地におきまして通常営業を行なっております.....)

失火から約一ヵ月後の告知である。通り一遍の説明であって、火災保険とか新しい印刷工場とかの内部にかかわる情報は外に出すはずもない。

商務印書館の火災に言及する文献を発表の順番にあげていく。

さまざまな文献

商務印書館が創業10周年を記念して発行した自社の図書目録がある。これが新資料のひとつだ。

商務印書館編訳所編輯『上海商務印書館創業十年新廠落成紀念冊』(上海・商務印書館 光緒三十三年(1907)年七月 非売品)
本館経始於光緒二十三年正月賃小屋数椽於上海英租界江西路德昌里購印機二具聊事印刷翌年六月移北京路有屋十二楹規模稍擴二十八年七月不戒於火乃建印刷所於美租界北福建路同時設發行所於棋盤街翌年正月又置編訳所於蓬路(後略)(光緒二十三年正月、本館は上海英租界江西路德昌里に数部屋を借り、印刷機2台で印刷業を始めた。翌年六月、北京路に移転し12部屋に規模が拡大した。二十八年七月、不注意にも火災にあった。そこでアメリカ租界北福建路に印刷所を建設し、同時に発行所を棋盤街に設けた。翌年正月には編訳所を蓬路に置いた)

創業10年を祝う冊子だから、苦しい経済状況をそのまま書き込んではいない。移転して12部屋に規模が拡大したように書いている。だが、部屋数が多いだけで、狭ければ拡大したことにはならない。火災に言及している点では珍しい文章だといえる。よそからの火災に襲われた、すなわち類焼とは説明されていない。だから商務印書館が火元だ。新聞報道と同じだとわかる。

注目すべきは、火災保険には言及していないことだ。しかも、自社の失火と北福建路の印刷所建設をなにも説明しない

ままにならべた。

印刷所は、借りたものではない。赤レンガ3階建ての印刷工場でしかも自前の新築なのだ。なによりも、印刷所の建設が何月なのかを明記しないのには首をかしげる。時間を書かないままに、火災と印刷所建設を並記した。ふたつの事柄が、あたかも関連があるように書いた。詳細を明らかにしたくなかったと考えれば、この曖昧な説明のわけがわかる。この解説は、誤解を生みながらのちの文献にそのまま引き継がれることになる。

つけくわえていえば、金港堂との合併についても触れない。4年前、すでに合併会社となっているにもかかわらずだ。これも曖昧にしたかった事柄のひとつに入るのだろう。

上の創業記念誌とほぼ同時期に日本で発行された書物のなかに、商務印書館について言及するものがある。

東亜同文会編纂局『支那経済全書』第12輯 丸善株式会社1908.10.1 / 1909.6.17四版

「第4編出版業 第4章上海ニ於ケル出版業」464-465頁

同館(注:商務印書館)ハ光緒二十一年即チ今ヨリ十二年前ニ創立セラレタルモノニシテ当時美華書館ニ在リテ印刷術ニ従事セル華人四名相謀リ独立シテ出版業ヲ設立セントシテ各五百円宛出資シテ北京路ニ印刷請負出版業ヲ開設セシガ後二年ニシテ火災ニ遇ヒ反テ焼肥ノ有様ニテ目下

ノ印刷所タル宏大ナル工場ヲ福建路ニ設立スルニ至レルモノナリ然レドモ之ガ為メ一時多大ノ負債ヲ生ジ非常ナル苦境ニ陥リ収支償ハズシテ將ニ解散ノ悲運ニ遭遇セントスルニ当リ金港堂主原亮三郎氏ノ来港ニ際シ氏此事ヲ耳ニシ山本達^{ママ}三郎氏等ノ大ナル斡旋ニヨリ彼我合同六十万円ノ資本ヲ以テ茲ニ其類運ヲ挽回シ遂ニ現今ノ隆盛ヲ見ルニ至リシナリ是レ実ニ光緒二十九年十月ナリキ

数字のこまかな違いはある。創業は光緒二十三年が正しい。創業者4人が美華書館に勤めていたというのは不正確だ。また、各人が各500円(元)を出資したのであれば合計2,000元だ。しかし、実際は3,750元である。火災にあうのを創業「後二年」としているが、約5年の間違い。山本達太郎ではなく山本条太郎だ。金港堂と合併した時の資金は、両者10万円を平等に負担し合計20万円であった。60万円というのは多すぎる。

だが、基本的な経過は押さえてある。美華書館の関係者が独立したこと、火災にあうこと、福建路に工場を設立したこと、金港堂と合併したことなどだ。火災と工場建設をならべたところは、創業10年記念誌の記述に似ている。

注目されるのは、「焼肥ノ有様」だと表現しているところだ。火災にあったにもかかわらず巨大な印刷所を福建路に建設できたのは、はたから言えば、焼け太りにほかならない。保険金でもおりたので

はなかろうか、と推測する余地が生じる。

見た目は焼け太りだが、その実、工場を設立して多大な負債を生じ倒産しそうになった。それが、日本の出版社と合併する原因である、と説明するのは興味深い。

火災と工場建設のために多大の負債が生じたという箇所は、自然な流れのように見える。火災保険には言及していないが、自然だと受けとめるのは、私が火災保険の事実を知っているためだろうか。無意識に記述の欠如を自分で埋め合せているかもしれない。ここに落とし穴がある。

まず、火災にあったにもかかわらず、どうして巨大な工場を建設できるのか。火災保険金は、はたして本当におりたのか。疑問がわくのは当然だろう。その説明がない。また、火災発生と工場建設の時間的關係はどうなのか、ここでもはっきり書かれていない。さらに、失火した会社に工場建設の資金を提供したのは誰なのかもわからない。借金をしたであろうが、そこが明確ではない。詳細が不明なのだ。

何も無いところから勝手に出てくるような説明ではない。文献にもとづかなければ書けない種類のものだと考える(後述)。

事実を把握しているように見える『支那経済全書』の文章だ。それをそのまま取り込んだふたつの文献が発表された。

内山清、山田修作、林太三郎合著

『大上海』大上海社1915.8。568-569

頁

商務印書館は今より十数年前の創立にして当時米国人経営の美華書館に在りて印刷に従事せる支那人四名相謀り独立して一出版社を設立せんとし各五百弗を出資し北京路に於て印刷請負出版業を開設せしが後二年にして火災に遇ひ更に福建路に於て宏大なる工場を設立するに至りしが之が為め一時多大の負債を生じ収支相償はずして將に解散の非運に遭遇せんとするに当り恰も上海滞在中の金港堂主原亮三郎氏之を聞き日支合同の計画を為し明治三十六年遂に合同資本六十萬元を以て漸く其類運を挽回し以て今日の盛大に及びたるものなり

中華道人「日支合弁事業と其経営者」『実業之日本』第22巻第13号1919.6.15。163頁

十、商務印書館 / 商務印書館は最初支那人のみにて経営せられ印刷出版を業とせしが、開業後二年にして火災の為め全部を烏有に帰し、更に多額の負債を為して新工場を建設せしも、遂に収支償はずして將に解散せんとするの非運に遭遇せるを、金港堂の原亮三郎氏聞きて、茲に日支合弁の事業と為し、万難を排して明治三十六年十二月遂に彼我合同資本六十萬元を以て開業の運びに至り漸く其類運を挽回し、以て今日の盛大に及ばしめた。

両者は、数字の誤りを踏襲して『支那経済全書』の関連部分とほぼ同文だということがわかる。

中華道人の文章は、中華書局が漢訳して商務印書館との裁判沙汰にまで発展する原因となった、とだけいっておく。

さて、中国側の古い文献で商務印書館の火災に触れるものをさがすのは、むづかしい。せいぜいが上に見た創業10年記念誌くらいだ。『創立三十年商務印書館志略』(1926.5)、あるいは、莊俞、賀聖鼐編『最近三十五年之中国教育』(上海・商務印書館1931.9)などは、失火の事実そのものを無視する。

後者の『最近三十五年之中国教育』に収録されている莊俞「三十五年来之商務印書館」は、研究の基本文献になっている。商務印書館の公式記録と見なされ、ほとんどの研究者が利用するから影響が大きい。つまり、火災について認識のない論文が再生産されるのである。

だが、そのような文章ばかりではないことも事実だ。知っている人は、知っている。しかし、中途半端な記述は、誤解を生むことにもつながる。

時間の流れに配置し直すと、次にくるのが高翰卿の文章である。

高翰卿「本館創業史 在發行所学生訓練班的演講」冰巖筆記原稿 1934? 初出未見。『(1897-1992) 商務印書館九十五年 我和商務印書館』北京・商務印書館1992.1。宋原

放主編、汪家燊輯注『中国出版史料
・近代部分』第3巻 武漢・湖北教育
出版社2004.10

高翰卿の文章について、少しばかり説明しておきたい。

商務印書館の長老幹部が、1934年に社内で話した自社の歴史である。金港堂との合併にも触れる。そればかりか、金港堂の娘婿が三井洋行の山本(条太郎)であること、夏瑞芳、印有模とも親しい間柄であることにも言及している。驚くことに、夏瑞芳と印有模のふたりと相談したあと「山本は本館と合併する気になった(山本倒有意同本館合辦)」とまで書いている。すなわち、商務印書館側のほうから金港堂側に合併の件を持ちかけたという意味なのだ。長老でなければ知らないことだ。これを含めて、いくつかの貴重な証言がなされている。重要文献のひとつだということができる。

だが、1930年代に行なわれたこの貴重な高翰卿講話は、商務印書館内部において深くしまいこまれたままだった。一般の目に触れるようになったのは、なんと約60年後の1992年のことだった。それ以前から商務印書館と金港堂の合併問題を追求していた私にとっては、なにをいまさら、と気が抜けるような思いがした。どういうことかといえば、高翰卿論文を読んでいれば、合併問題に山本条太郎と印有模らが関係していることをつきとめるのにあれほど苦労はしなかつたらう、と感じたからだ。逆にいえば、それまで私が追求して得ていた結果(1982年に論

文を発表した)が正しかったことが、高翰卿論文によって確認されたということにもなるのだが。

それはさておき、火災である。

遷到北京路約有五年，在光緒二十八年的七月，忽遭火焚，所有機器工具，尽毀於火，幸新定的機器已到而事前保有火險，領到賠款。就在福建路海寧路購地建造印刷廠。(即是現在大東書局的印刷所)發行所遷到河南路，地址為現在冠生園北隔壁之171、173号門牌。7頁(北京路に移転して五年がたった光緒二十八年七月、火災にあい、すべての機器工具が焼けてしまった。新しく注文していた機器はすでにとどいていたが、幸いなことに事前に火災保険をかけていたので賠償金を受け取った。ただちに福建路海寧路に土地を購入し印刷工場を建設した(すなわち現在の大東書局の印刷所である)。發行所は河南路に移転し、場所は現在の冠生園の北隣の171、173号である)

ここでひさしぶりに火災保険がでてくる。しかも、賠償金を受け取ってそれが印刷工場の新築につながったとはっきり述べている。あとで説明するが、これは張孝基論文と一致する。

最初にいっておきたいのは、高翰卿は、火災保険について述べているがそれは印刷機器にかけたという。家屋の火災保険について何も書かない。不思議である。

このたび、この箇所を引用して、以前の私の読みとは別の解釈も可能ではないかと思うようになった。ただし、かなり無理な別の解釈だとは思う。

以前は、新しく注文していた印刷機器がすでに届いていて、それが焼けたと考えた。だから、火災保険金がありた。

新しい印刷機械が届いていれば、すぐさま古いものと入れ替えるのが普通だろう。だから、焼けたのは入れ替えたばかりの新しい機器にちがいない。まことに理解しやすい話だ。新しい機器には火災保険がかけてあった、というのも納得がいく。夏瑞芳が副業に保険ブローカーをやっていたからでもある。

だが、そうではないようにも読める。機器が火災で焼けた。ここまでは、いい。だが、焼けたのは、古いものか、それとも新しく注文してすでに届いていたものか、あやふやだ。

別の解釈というのは、こうだ。

焼けたのは古い機器で、「新しく注文していた機器はすでにとどいていた」は、別物である。つまり、古い機器が火災にあい、新しく届いていた機器は別のところに置いてあった、と読めなくもない。

焼けてしまったのは、以前から設置していた機器工具だけだ。新品の印刷機械は無傷で存在しており、これにかけていた火災保険が下りた、という解釈だ。だが、どう考えても奇妙な論理である。火災の被害にあっていない機器に保険がありうるだろうか。可能な解釈かもしれないが、私は納得しない。

ところが、この奇妙な論理をそのまま展開する文章がある。実をいえば、高翰卿論文の別の読み方を考えたのも、次の文章を見たからだ。火災と保険と印刷機器の関係については、あとでまとめて考察する。 □

【注】

- 1) 場所の名称と役割分担などの説明は、鄭逸梅「夏瑞芳、鮑咸恩創辦“商務”略記」(『書報話旧』上海・学林出版社1983.8. 3-6頁)、高翰卿「本館創業史 在発行所学生訓練班的演講」(冰巖筆記原稿1934?)および朱蔚伯「商務印書館是怎样創辦起来的」(『文化史料(叢刊)』第2輯1981.11. 142頁)による。以下も同じ。

【清末小説研究会 新刊のご案内】

樽本照雄著

清末小説研究資料叢書 9

清末小説研究論

B5判 417頁 限定150部 定価：5,250円

漢訳アラビアン・ナイト (14)

樽本照雄

6 英文原本の探求3 タウンゼンド版からフォースター版、スコット版へ

私は、本稿の途中で「タウンゼンド版には語句の違う異版が存在するのだろうか」と疑問を提出しておいた。

柳田泉が指摘しているように、井上勤訳がタウンゼンド版にもとづいているのであれば(事実は、違うのだが)、おなじタウンゼンド版に基づいているはずの奚若の漢訳が一致しないのはおかしい。

タウンゼンド版に拠っていると見えながら、漢訳の語句が底本と異なるばあいがあるということは、手元のものと一致していない以上、異版の存在を考える理由となる。

私の使用しているタウンゼンド版について、すこし説明をしておきたい。

既述のように、手元に1冊あって、これにもとづいて漢訳を検討してきている。手元の1冊しかないから異版があるのではないかと疑った。

その後、同社発行の2冊を入手した。

つまり、現在、私のところにはタウンゼンド版の原本が3冊ある。3冊では十分ではないかもしれないが、1冊だけよりはマシだろう。

書目の上では、「タウンゼンド Rev. Geo. Fyler Townsend 改訂、出版社は、ロンドンのウォーン F. Warne & Co., 1866」というものを示したことがある。

ホートン Houghton、ダルジール Dalziel などの手による挿絵を配し、前文が8頁、本文632頁であるという。1866年版(初版か)は、私は未見である。書目の簡単な記述だけでは、挿絵が全部で何枚あるのか、それすらもわからない。

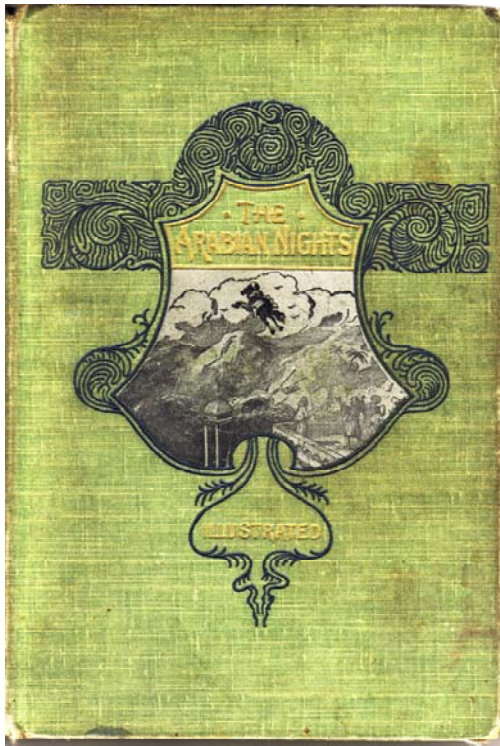
タウンゼンド版1

今まで使用してきたタウンゼンド版(とりあえず同版1と称する)は、刊年不記ながら、出版社は、初版と同じロンドンとニューヨークのウォーン Frederick Warne & Co. だ。ラウトレッジ社発行のタウンゼンド版は、未見。

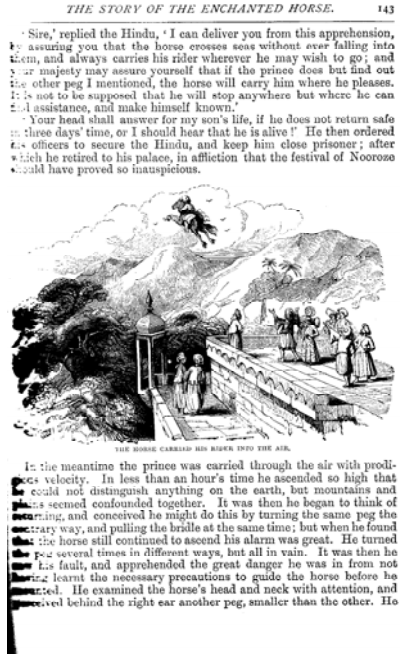
出版の順序からいえば、この刊年不記本から説明しはじめるのは、適当ではないかもしれない。ただ、今までこの本を漢訳の比較対照に使ってきたので、いきがかり上、こちらを優先する。

緑色の硬い表紙で、そこには、空飛ぶ馬としがみついている人物の挿絵(後述)が印刷してある。挿絵の上に“THE ARABIAN NIGHTS”、下に“ILLUSTRATED”と手書きで文字が金色だ。表紙の大きさは、ほぼA5判に近い(20.5×13.5cm)。

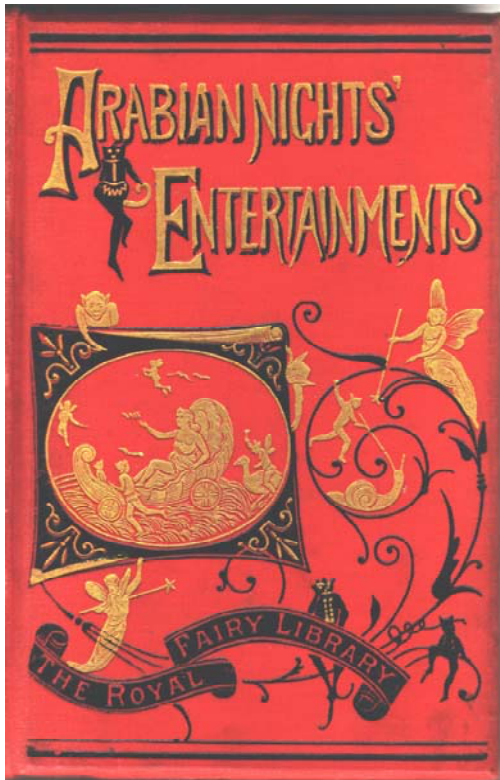
煙の出ている壺のそばに老人漁夫が立



タウンゼント版 1



タウンゼント版 3 の本文挿絵



タウンゼント版 2



タウンゼント版 3

っている彩色挿絵が、扉の前にはさみこんである(オフセット印刷)。

扉には、THE ARABIAN NIGHTS' ENTERTAINMENTS/ A NEW EDITION, REVISED, WITH NOTES, BY THE REV. GEO. FYLER TOWNSEND, M.A. /WITH ILLUSTRATIONS. と表示する。

前言8頁(実質は3頁)、目次2頁、本文は、活字のみで組まれており629頁ある。注の索引も通しページ数だから、索引を含めれば全632頁ということになる。60話を収録する。

挿絵の目次は、ついていない。

挿絵は、前出漁夫を含めて色彩のものが3枚、あとは白黒銅版(元が銅板で、本書はオフセット印刷)で、8枚。ともに本文のページに数えない独立した存在として配置してある。また、本文の活字をおしのけるかたちでの挿絵は組み込まれていない。なぜ、こういう説明をするかといえば、ページ別だでの挿絵のほかに、本文にも挿絵を組み込んだ別の版本が発行されているからだ(後述のタウンゼンド版3)。

本文の紙質は、よい方ではない。悪いといってもいい。印刷方法もオフセット印刷で、本文の端の部分など印刷が不鮮明な箇所があったりする。刊行年が記載されていないこととあわせ考えると、年月を経た後刷りのように見える。

手元にあるこの1冊だけでは、語句の違う版が存在しているかどうかを確かめることができない。だから、別のタウンゼンド版を見る以外に方法がない、とい

った。

タウンゼンド版2

赤色の硬い表紙で、妖精と不気味な動物があしらわれている。上に“ARABIAN NIGHTS' ENTERTAINMENTS”、下に“THE ROYAL FAIRY LIBRARY”と書かれる。

扉のまえに、アラジンがランプを持っている彩色挿絵が1枚かかげられる。この版本では、彩色挿絵はこの1枚きりだ。

扉の表示、目次、本文は、上のタウンゼンド版1と同一である。60話を収録する。

判型は、タウンゼンド版1よりもひとまわり小さい(19×12cm)。だが、本文の活字部分についていえば、大きさは、まったく同じである。つまり、全体の判型が小さくなったというのは、本文の余白部分をすこし裁断した結果だという意味だ。

紙質は、タウンゼンド版1よりも、ややよろしい。活版印刷。彩色挿絵については、上下左右の端を削除する。全体の判型を少し縮小したことが原因だろう。

白黒挿絵は、全部で10枚ある。こちらは、タウンゼンド版1と同寸だが、ただし、枚数が一致しない。2枚多い。

該本の以前の購入者によって献辞が手書きされている。それには1895年とあるから、それより前の発行年だとわかる。

タウンゼンド版1と2についていうと、挿絵の枚数に違いがあるとはいえ、本文は、完全に一致している。

本文のページ数を見ると、このタウンゼンド版1、2は、初版と同一物だと推測される。ただし、挿絵の数が異なっていることは、すでにのべた。

この2種類のタウンゼンド版に、もうひとつの版本をならべてみる。

タウンゼンド版3

扉には、THE ARABIAN NIGHTS' ENTERTAINMENTS. /A NEW EDITION, REVISED, WITH NOTES, BY THE REV. GEO. FYLER TOWNSEND, M.A. /With Original Illustrations AND SIXTEEN PAGE PLATES PRINTED IN COLOURS. /LONDON AND NEW YORK: FREDERICK WARNE AND CO. /1887. と示してある。

彩色挿絵が16枚あることをうたっており具体的だ。

見れば、挿絵は、色彩のもの(ページ別だて)が表示のとおり16枚あり、白黒は14枚だ。さらに、この版本のみ本文に挿絵を組み込み、それも多数を収録する。

表紙の地色は、灰色に見える。活版印刷。判型はすこし大きくなる(21×14.5 cm)。紙質は、いい。本文は注の索引を含んで560頁ある。同じく60話を収録する。

前文8頁(実質4頁)、本文目次のほかに彩色挿絵の目次と白黒挿絵の目次をかかげる。

字句は、3種ともに同一である。

1887年版のタウンゼンド版3は、タウンゼンド版1、2とどのような関係にあるのだろうか。

てがかりはふたつある。

ひとつは、書目に見える初版らしい1866年版とページ数が一致するのがタウンゼンド版1、2であること。

もうひとつは、タウンゼンド版3に「もとの挿絵つき With Original Illustrations」と表示していることだ。

もともとあった挿絵を全部収録しています、とわざわざ書くのは、タウンゼンド版3みずからが初版ではないことを認めていることにほかならない。

タウンゼンド版3は、初版にあった挿絵を残さず収め、しかもその上に本文にも新たに挿絵を多数ほどこしたと考えられる。

3種のタウンゼンド版の関係

タウンゼンド版1の表紙が私の興味を引く。先ほど触れた「空飛ぶ馬としがみついている人物の挿絵」である。この挿絵は、タウンゼンド版3の143頁に掲げられているものを流用しているのだ。

そうすると出版の時間的關係は、タウンゼンド版3のあとにタウンゼンド版1が発行されたことになる。

1は、オフセット印刷なのだから、タウンゼンド版3(1887年版)をそのまま複製できるはずだ。3の方が挿絵が多くて楽しい。しかし、そうはしていない。1の本文は、初版に拠ったと考えられる。

つまり、タウンゼンド版2が初版の重版として存在しており、タウンゼンド版3が本文に挿絵を増やして新たに組版印刷発行された。そのさい、初版の挿絵は

全部を収録する。タウンゼンド版1は、本文を初版によって複製し、初版の挿絵のいくつかを選択して収録する。表紙の意匠は、タウンゼンド版3の挿絵より流用した。

出版の流れをざっと示した。刊行年がないものについては、以上のように推測した。だが、格別に推測して流れを示すということは、このさい、必要ではないかもしれない。

問題は、本文なのだ。この3種類を見るかぎり、タウンゼンド版には、語句の違う異版は基本的にはない、と考えていい。

ちょっと横道にそれる。3種の版本を比較していると、タウンゼンド版3(1887年版)には、乱丁があることがわかった。インターネットで検索し、イギリスの古書店から購入したのだが、100年以上も前の本にしては値段がそれほど高くない理由なのだろう。ただし、乱丁の注記はなかった。知っていたのか、知らなかったのか、それはわからない。

タウンゼンド版についていえば、その異版を考慮に入れる必要がなくなった。本文が同一であるからだ。

奚若が漢訳した英文原本の候補としては、いままで、レイン版、タウンゼンド版、サグデン版を検討してきた。

いくら「序」において、レイン版にもとづいていると書いていようが、語句の違いからレイン版は、底本候補からはずれる。「レイン版にもとづく」というのは、英文原本についての解説者の勝手な思い

こみ、推測でしかないことは明らかだろう。

タウンゼンド版にある文章が、サグデン版にはない。また、その逆の現象がある。

漢訳の一部は、タウンゼンド版らしく思える。また、別の箇所はサグデン版によったとしか考えられない。

つまり、漢訳は、タウンゼンド版とサグデン版の間を往復しているように見える。

しかし、奚若が、タウンゼンド版とサグデン版の2種類の原本を手元に置いて双方から抜粋しながら漢訳したとは、思えない。両者に見えない物語、あるいは単語が漢訳に出現している事実は、どうしても解決できないのだ。

もういちど考えてみる。英文原作のどちらか一方の版本にある文章を、漢訳はそのまま取り入れている。つまり、漢訳は、両者を統合しているといえよう。

ということは、両方の文章をそなえた1冊の原本が、さかのぼって存在している可能性を示してはいないか。

すなわち、タウンゼンド版とサグデン版は、ある1冊の原本から派生した改編本ではないか、という推測に思い至るのである。ある1冊の原本ではないならば、近い原本から派生したものではないか。

物語の大筋は一致していても、改編者の意識が異なるから、それぞれに原本から取りだす箇所が違ってしまふ。

タウンゼンド版とサグデン版から、両者がもとづいたもとの原本1冊にさかの

ぼることが、とりもなおさず漢訳の底本にたどりつくことを意味する。

どうやら、奚若漢訳の英文原本を特定する時がきたらしい。これも数種類の版本を比較検討してきた結果である。ムダな作業ではなかった。 罫

清末小説から

- 王 虹 恋愛観と恋愛小説の翻訳 林紓 訳と長田秋涛訳『椿姫』を例として 名古屋大学国際言語文化研究科 『多元文化』第2号 2002.3
中国と日本におけるマグリット像 劇『椿姫』の翻訳と上演をめぐる 名古屋大学国際言語文化研究科 『多元文化』第4号 2004.3
- 湯 哲声 『流行百年：中国流行小説經典』 北京・文化藝術出版社2004.1
- 范 伯群 (『流行百年：中国流行小説經典』) 建立生態平衡的中国現代文学史観(代序) 湯哲声 『流行百年：中国流行小説經典』 北京・文化藝術出版社2004.1
- 寇 振鋒 『新中国未来記』における「志士」と「佳人」 『経国美談』 『佳人之奇遇』からの受容を中心に 名古屋大学国際言語文化研究科 『多元文化』第4号 2004.3
- 柳 珊 在歴史縫隙間掙扎 1910-1920年間的《小説月報》研究 南昌・百花洲文藝出版社2004.12
- 徐 鵬緒 『中国近代文学史綱』 北京・中国社会科学出版社2004.12
- 陳 建華 民族“想像”的魔力 論“小説界革命”与“群治”之關係 李喜所主編 『梁啓超与近代中国社会文化』 天津古籍出版社2005.1
- 于 潤琦 (『唐弢藏書』) 後記 于潤琦編著 『唐弢藏書』 北京出版社2005.1
- 寇 振鋒 清末『新小説』誌における『政治小説回天奇談』 明治政治小説 『英国名士回天奇談』との比較 名古屋大学国際言語文化研究科 『多元文化』第5号 2005.3
- 黄 霖 近百年来「中国小説史」的編纂 台湾 『中国文哲研究通訊』第15卷第1期 2005.3
- 周 振鶴 晚清西学流程度的一個視角(代前言) 『晚清營業書目』 上海・世紀出版集團、上海書店出版社2005.4
- 劉精民収蔵 (『光緒老画刊』) 前言 『光緒老画刊 晚清社会的《图画新聞》』第1輯 北京・中国文聯出版社2005.5
- 竺 青 稀見清末白話小説集殘卷考述 『中国古代小説研究』第1輯 人民文学出版社2005.6
- 歐陽 健 『晚清小説簡史』 太原・山西人民出版社2005.6 古代小説断代簡史叢書
- 高津 孝 米国の中国出版文化史研究 『中国社会と文化』第20号 中国社会文化学会2005.6.30
- 王 友貴 『翻譯家魯迅』 天津・南開大学出版社2005.7

- 孟昭毅、李載道主編 『中国翻譯文学史』
北京大学出版社2005.7
- 韓 洪拳 『林紓小説研究 兼論林紓自撰
小説与伝奇』 北京・中国社会科学
出版社2005.7
- 郭 豫適 (『林紓小説研究 兼論林紓自撰
小説与伝奇』)序 韓洪拳 『林紓小説
研究 兼論林紓自撰小説与伝
奇』北京・中国社会科学出版社2005.
7
- 谷 行博 【書評】都市訪問者の上海遊興物
語 社会小説『海上繁華夢』につ
いて 『野草』第76号2005.8.1
- 樽本照雄 『清末小説研究論』 清末小説研
究会2005.8.1 清末小説研究資料叢
書9
- 趙 修慧 一個年青編輯的夢想 紀念《中
国新文学大系》出版七十周年 『出
版史料』2005年第3期(新總第15
期) 2005.9.25
- 柳 和城 張元濟的一封信札 兼談南洋公
学訊書院“歸併”說 『出版史料』
2005年第3期(新總第15期) 2005.
9.25
- 楊 劍龍 論鴛鴦蝴蝶派偵探小説的叙事探索
『中国現代文学研究叢刊』2005年
第4期(總第105期)
- 張 光芒 【書評】評楊聯芬《晚清至五四：
中国文学現代性的發生》 『中国現
代文学研究叢刊』2005年第4期(總
第105期)
- 『明清小説研究』2005年第2期
(總第76期)2005発行月日記
- 衛道者言 論吳趸人的写情小説……魏文哲
試論近代小説出版中的盜版現象 以《申
報》小説廣告為例 ……文 娟
- 陳蝶仙又一筆名“超然” ……董智穎
《通俗文学之王包天笑》一書中的幾個問題
兼与樂梅健先生商榷 ……沈慶会
- 樂梅健 『純与俗：文学的对立与溝通』
台湾・文史哲出版社2005.2
- 前期《小説月報》的重要主持人 惲鉄樵評
伝
- “礼拜六”派大本营的主要营造者 王鈍根
評伝
- 求写高尚情，尽却淫啼習 吳綺縁評伝
中国近、現代掌故小説大家 許指巖評伝
思維縝密的偵探小説家 陸澹安評伝
不应遺忘的優秀通俗長篇小説 論包天笑的
《留芳記》和《上海春秋》
通俗文学大師在台湾 包天笑在台北四年的
文学生活
- 羅蘭花開憶瘦鷗 哀情小説家周瘦鷗的一生
“前五四时期”的文学
- 陳平原主講、梅家玲編訂
『晚清文学教室：從北大到台大』
台湾・麦田出版、城邦文化事業股份有限公司
2005.5
- 從北大到台大 《晚清文学教室》序
- 第1講 報刊研究的視野及策略
第2講 稿費制度与近世文学
第3講 旅行者的叙事功能
第4講 晚清翻譯小説
第5講 從新教育到新文学
外1講 文学的北京
- 附録1 「大学生訪問大学者」 陳平原老
師訪談録
- 附録2 如響斯応 来自学生的回応
(『晚清文学教室：從北大到台大』)編後記
梅家玲